『中国地区英語教育学会研究紀要』№14（1984.8.1）

日本人英語学習者との Open-ended dialog にみられた Refusal expressions の特徴

広島大学大学院　波多野　五　三

I　はじめに

コミュニケーションを成立させる要因には，語彙，文法，発音など言語体系に関する知識のほかに，社会文化的な背景知識や話題，文体，語彙使用域の選択などいくつかの会話のルールがある。一般的に，発話者が自分の伝達したいことを一方的に表現することにくらべて，話し相手の発話内容に応じた適切な応答を交わすことのほうが困難であるように思える。なかでも，ある特定の話題を避けたり，誘いや提案を拒絶したり，不平や不本意を述べたりするなど，何らかの negation を表現するのはとりわけ難しいといっても過言ではあるまい。

そこで，本研究においては，refusal expressions を誘発するような situational cue を与えた場合，一般英語学習者（日本人学生）がどのような発話を表出するかを実験し，その特徴を分析する。

II　Refusals に関する所見

会話のルールが言語社会・文化的な要因によって規定されるのと同様に，拒絶に関する表現形式も文化的な因子を多く含んでいる。たとえば，英語の‘no’は簡潔で重宝な表現であり，場合によっては，聞き手に何ら不快感やぎこちなさを与えないのに対し，日本語の「いいえ」はどこか堅苦しい上に疎略な響きがあるので，日本人は何か別の表現によって，「いいえ」ということばを直接口にしないようにする（④：185－6）。Ueda（④：186－9）によれば，日本人が拒絶の意志を表わすのに使う表現は16通りあるという。その中には，(1)イエスかノーかわからないあいまいな言い回し（vague and ambiguous “yes” or “no”），(2)ごまかすためのいい加減な口実（lying, equivocation, etc.），(3)「ええ，でも…」のような遠回しな断り方（“yes, but ...”），(4)「考えておきます。」というその場しのぎ（delaying answers）など，我々が日常生活で頻繁に用いる strategies がある。文化的な背景が異なる欧米社会でも，ただ一言「いやだね。」などと断わるのはぶっきらぼうな印象を与えるので，日本と同様，家族や親友など親しい間柄に限られる。その代わりに，悪意のない嘘（white lies）がよく使われる傾向にある（⑤：14）。日本語においては，できるだけ自分の感情や真意を隠しながら話すことが一種の美徳とされているので，そうした場面における発話も当然遠回しな言い方になる。西山（⑥：11）の言葉を借りれば「英語の文章の方が日本語の文章よりもっと正直なものである」のかもしれない。Naotsuka, R., *et al.*（③：94）は，“Do you often use indirect refusal in your country?”という質問を日本在住の外国人に対して行い，その答えを右のようにまとめている。

Nationality	US	UK etc.	Europe etc.	Asia	Total
Category	39	20	28	23	110
Often	32 82%	14 70%	22 76%	14 61%	82 75%
Seldom	7 18%	6 30%	6 24%	9 39%	28 25%

このアンケート結果によれば，アメリカ人はヨーロ

ッパ人にくらべて，間接的な拒絶を好んでいることになる。「間接的」といっても多様な表現の仕方があるに違いない。外国語としての英語の学習者である日本人が，英語で間接的に拒絶を表わそうとする場合，日本語の会話のルールをそのまま適用しうるものであろうか。誤解を招かない程度に日本語の流儀を押し通すこともできる。しかし，外国語を話すという異質な体験は，もうひとつのアイデンティティーの発見や育成に役立つことも考慮に入れる必要がある。換言すれば，日本語で言えないことが外国語ではスラスラと口にできうるのである。これは，ちょうど日本語においても，他の地方の方言で卑俗な表現を口にしても恥ずかしさを覚えない現象に類似している。とはいうものの，外国語でノーと言えるためには，単なる文型や語彙項目など言語の操作ルール以上の能力が要求される。すなわち，いつどのようにノーと言えば適切なのか，どんな場合に不適切となるのかを知っていなければならない。また，話し相手の年齢，性別，職業，話し手との関係など様々な要因も考慮に入れなければならないのである（②：33）。

Ⅲ 英語における Refusals の構造

英語母国語話者間の会話をもとに公式化された refusals は次のとおりである（②：37）。

$$\pm\begin{pmatrix}\text{Apology}\\ \text{Thanks}\end{pmatrix} + \text{Excuse} \quad \pm(\text{Alternative})$$

Excuse が Refusals の核を成しており，Apology, Thanks, Alternative のいずれも取捨可能な随意的要素である。Apology と Thanks は Excuse に先行あるいは後続してもよいが，同時に発せられることはない。また，Alternative は Excuse に付加される。Apology, Thanks, Excuse, Alternative に用いられる主な表現例を以下に示す。

1. Apology
   I'm sorry, but ....
   I'd like to, but ....
2. Thanks
   Thank you for your invitation / offer / suggestion, etc., but ....
   It's very kind of you, but ....
3. Excuse
   I'd rather not, because ....
   I'm going to ....
   I just can't ....
   I have to ....
4. Alternative
   How about ...?
   Why don't you ...?
   I'll think about it.

この他，声質，イントネーション，false start, repetition，顔の表情，視線などによる意思伝達行為も付随するものと考えられる。

Ⅳ 実　験

1. Subjects

被験者は，日本人英語学習者18名（内女性９名）で，その内訳は，広島大学教育学部生７名，大学予備校生10名，広島大学教育学部教官１名である。

2. Instrument

「あまり好意を抱いていないクラスメートからデートに誘われましたが，あなたは？」という日本語の文を書いたキュー・カードを示し，断わるという役割を与える。Addressor X（著者）が上述の cue と同じ内容を英語で話しかけることにより会話を始め，open-ended dialog を行い，その様子をテープレコーダーで録音した。

3. Design and Procedures

Refusals を表現する場合の discoural pattern（①）を以下のように想定し，できるだけ format に従って，X（addressor）は Y（addressee）から自然な発話を引き出した。分析の対象となった発話は Y1 と Y2 である。発話文の文法性や発音の正確さなどについては，intelligible であればすべて容認した。

DISCOURSAL PATTERNS

SPEAKERS	FUNCTIONS	REFUSALS	CATEGORIES	EXPRESSIONS
X1	Make a suggestion			"Hi, (Y's name). I'm just wondering if you will be free this coming Saturday."
Y1	Raise a refusal	±(Apology / Thanks) + Excuse ± (Alternative)	1. duty, work, appointment, etc. 2. personal preference 3. family affairs 4. conditions → suggestions	
X2	Counter it			"(Do you know) they are showing a great film/movie/picture at ____. (You can't miss it.)
Y2	Refuse again	The same as above	The same as above	
・ ・				"Saturday is the last day," etc.
Xn	Play down			"O. K. See you/By now/Take care."

4. Results

被験者が produce した発話文は以下に示すとおりである。Excuse は，その内容に従って，「仕事」，「好み」，「家庭」，「状態」の４項目に分類した（③：96－97）。尚，・，＊，△の記号はそれぞれ同じ被験者の発話文であることを意味している。

Duty

- Saturday is the only time that I can work on _____. 1
- We'll have_____. 1

I have an appointment / date with_____. 2

I belong to_____. 1

I'll be busy with (part-time jobs, etc.) 5

Excuse	I have an exam / homework / assignment, etc.	3
	I have to study.	5
		18
	Preference	
	I'll go to a concert with_____.	1
	I don't like (such)_____.	6
	I'm going to swim.	1
	I want to go shopping.	1
	I don't feel like_____.	1
	I'll go on a picnic.	1
		11
	Family affairs	
	I'll be scolded by Mom.	1
	I'll clean my room.	1
		2
	Personal Conditions	
	I have a_____friend.	3
	I have no money.	1
	Δ I'll be tired.	1
	Δ I have an eye illness.	1
		6
	Alternative	
	* Why don't you go with_____?	1
	* How about_____?	1
	You'd better speak to_____.	1
	There are many more girls around you.	1
		4
	Apology	
	(I'm) sorry.	6
	Thanks	
	No, thank you.	2
	Let's go after_____.	1
	• I'm interested in _____, but I just can't tell now.	1
	I'm free, but ...	4
	I like to_____, but ...	3
	• Let me think about it.	1
	• I may have a chance, but ...	1
	I don't want to refuse, but ...	1
	Thank you for the invitation.	2
		16
	Other Expressions	
	Let me see.	1
	If_____, then I'll_____.	2
		3

5. Considerations

Open-ended dialog とはいえ，あらかじめ situational cue が与えられ，turn-taking がほぼ規範化されているので，authentic な discourse とは異なっている。しかし，今回の実験では，拒絶に関する表現を人為的に引き出したので，談話としての自然さよりも，文体や文機能の特徴に注目することにする。

Excuse では，duty を言い訳にした例が 48.6%(18/37) あり，中でも，"I'll be busy with_____." や "I have to study." が顕著であった。これは，日本人が，家族や家事などに関したプライベートな理由にくらべて，「仕事」を口実にする傾向があることを示している（③：98）。

Preference では，"I don't like (such)_____." という表現が多いが，これは随分ぶっきらぼうな断り方である。英語では婉曲な言い回しが思いつかなかったのか，それとも，英語なら直接的な断り方も許容されると考えたのか，複数の理由が考えられる。

Thanks では，Ueda（④：186)のいう 'yes, but ...' 型の拒絶が10例（62.5%）もある。

以上の結果から，英語の refusal expression においても，母国語が何らかの形で発想に干渉したり，目標言語の会話のルールを overgeneralize したりする傾向があると言えよう。

V おわりに

英語を母国語としない話者同志が英語で会話を交わす場合には，英語の会話のルールに従う必要はない。こうした場合は，むしろ，国際語としての英語の性格と，各発話者の文化的背景が尊重されてしかるべきであろう。しかし，相手が英語の母国語話者である場合は必ずしもそうではない。英語を母国語としない話者は，外国人として失礼にならない程度の断わり方を身につけておかなければならないのである。

〔参考文献〕

1. Candlin, C.N. (1981) "Discoursal Patterning and the Equalizing of the Interpretive Opportunity," in L. Smith (1981) (ed.) *English for Cross-Cultural Communication.* St. Martins Press. pp. 166–199.
2. Kana, M. (1982) "Saying No in English: A Sociolinguistic Lesson on Refusals," *RELC J,* 13 / 2, pp. 29–50.
3. Naotsuka, R. *et al.* (1981) *Mutual Understanding of Different Cultures.* Science Education Institute of Osaka Prefecture. pp. 81–99.
4. Ueda, K. (1974) "Sixteen Ways to Avoid Saying 'No' in Japan," in Condon, J.C. and M. Saito (ed.) *Intercultural Encounters with Japan.* The Simul Press, Inc. pp. 185–192.
5. 直塚玲子 (1979)「文化と相互理解」『英語教育』大修館．28／5，pp. 12－14
6. 西山　千 (1978)「英語にない『お願いします』」『英語教育』大修館．27／9，pp. 9－11